

令和元年6月17日現在

機関番号：36101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07292

研究課題名(和文)『古今和歌六帖』の万葉歌に関する基礎的研究

研究課題名(英文)A Study of Manyoka in "Kokin Waka Rokujo"

研究代表者

田中 智子(TANAKA, Tomoko)

四国大学・文学部・助教

研究者番号：00807422

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、『古今和歌六帖』における万葉歌の位置づけに再検討を加え、当該の万葉歌が後世の物語作品や歌人にいかに享受されたかに検討を加えた。平成29年度には、藤原実方の家集に検討を加え、実方の詠歌に『古今和歌六帖』がふまえられている箇所が少なくないことを考察し、人々の和歌の教養の基盤を成すような歌集としての同集の意義を明らかにした。平成30年度には、『源氏物語』と『古今和歌六帖』の関係について検討を加え、『源氏物語』が『古今和歌六帖』に学びつつ、和歌的表現を散文に取り入れた様相を明らかにした。また並行して、『古今和歌六帖』の構成が『万葉集』の構成にいかに学び、それを取り入れているかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『古今和歌六帖』は『万葉集』・『古今集』等の前代の歌集の伝統を受け継ぎ、『枕草子』・『源氏物語』等の後代の作品に多大の影響を与えた、和歌史上逸することのできない重要な歌集である。本研究では、『古今和歌六帖』所載の万葉歌を中心に考察を行い、『古今和歌六帖』がいかなるかたちで『万葉集』を享受したかについて検討を加えた。さらに、万葉歌が、『古今和歌六帖』を介して、『源氏物語』などの後世の仮名散文や藤原実方などの歌人らに影響を与えた様相をも明らかにした。本研究は、文学史・和歌史上における『古今和歌六帖』の位置づけについて、新たな見通しを開いたものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, I made a list of Manyoka in "Kokin Waka Rokujo", and based on it, re-examined the positioning of Manyoka in "Kokin Waka Rokujo". I did research on how Manyoka was quoted by the story works and poets from "Kokin Waka Rokujo". In 2017, I did research on "Sanekata shu". It is considered that Manyoka of "Kokin Waka Rokujo" was quoted by waka of Fujiwara no Sanekata. In 2018, I did research on the relationship between the "The Tale of Genji" and the "Kokin Waka Rokujo". I considered that "The Tale of Genji" quoted Manyoka from "Kokin Waka Rokujo". I also studied how the structure of "Kokin Waka Rokujo" learned and incorporated the structure of "Manyoshu".

研究分野：中古文学

キーワード：古今和歌六帖 万葉集 万葉歌 源氏物語 面影 藤原実方

## 1. 研究開始当初の背景

『古今和歌六帖』(以下『古今六帖』)は1000首超の出典未詳歌、約1200首の『万葉集』歌、約700首の『古今集』歌を収めると同時に、『枕草子』・『源氏物語』にも所載歌が多数引歌された、大部の歌集である。同集は、前代の歌集の享受史的観点からも、後代の文学作品への影響史的観点からも注目される、重要な存在といえる。特に、同集の所載歌の約4分の1を万葉歌が占めていることから、昭和後半期には『古今六帖』所載の万葉歌に注目が集まり、同集に関する研究論文が多数発表された。中西進『古今六帖の万葉歌』(武蔵野書院、1964年)などはその代表的成果である。

ただし、『古今六帖』の現存伝本の本文には乱れが多いことから、その後同集への学界の関心は徐々に減退していった。しかし、『古今六帖』の伝本研究が進展し、個々の所載歌の注釈や出典調査といった基礎的研究が進められている今日、同集の文学史的・和歌史的意義を再評価する動きがみられるようになった。

如上の研究状況を受け、稿者は、『古今六帖』に採られた万葉歌の性格を明らかにし、さらには平安朝における『万葉集』享受の具体相を考究することが重要であると考えた。既に稿者は旧稿(田中智子「古今和歌六帖の万葉歌と天暦古点」(『東京大学国文学論集』12、2017年3月))で、『古今六帖』の万葉歌の本文と『万葉集』の訓点に関する研究を行い、『古今六帖』が『万葉集』巻4の附訓本を撰集資料としたとみられることを明らかにしている。

旧稿での研究成果をふまえつつ、本研究では、『古今六帖』の万葉歌についての基礎的研究を行い、そのうえで『古今六帖』の万葉歌が後世の歌人や物語作品にいかなる影響を与えたかに検討を加えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、『古今六帖』の万葉歌の研究を通じて、平安朝における『万葉集』享受の具体相を解明するとともに、『古今六帖』という歌集の特色・性格を明らかにすることであった。如上の問題意識のもと、研究の当初、解明を目指したのは以下の3点である。

- (1)『古今六帖』が万葉歌を摂取するにあたって資料とした書物がどのようなものだったか。それは『万葉集』そのものだったのか、そうだとすればその『万葉集』には訓が付されていたのか、という問題。
- (2)『古今六帖』の参照した『万葉集』が附訓本だったとすれば、その訓は天暦古点とどのような関係にあるものなのかという問題。
- (3)『源氏物語』などの後世の作品に引歌された万葉歌や、藤原実方をはじめとする後世の歌人の和歌にふまえられた万葉歌と、『古今六帖』の万葉歌との関係性 両者の間に書承関係は認められるのか という問題。

以上の3つの観点から『古今六帖』の万葉歌の性格に考察を加えるのが、本研究の目的であった。詳しくは後述するが、上記の目的意識のもと研究に取り組んだ結果、本研究では特に(1)と(3)の問題についての研究成果を挙げることができた。

## 3. 研究の方法

「研究の目的」に記した3点を明らかにするための基礎作業として、本研究ではまず、『古今六帖』所載の万葉歌の一覧表を作成した(なおその際、中西進『古今六帖の万葉歌』に学ぶところが大きかったが、万葉歌の認定は稿者なりの基準に基づくものに改めた)。

そのうえで平成29年度には、『実方集』の詠歌のうち『古今六帖』の影響を受けたとみられるものの一覧表を作成し、『実方集』にみられる『古今六帖』享受の様相の解明を目指した。その際、『古今六帖』に所載された個別の歌を引用したとみられる事例のみならず、『古今六帖』にみえる各種の項目そのものをふまえたとみられる事例についても検討を加えるよう留意した。上記の検討作業のなかで、特に、『古今六帖』の万葉歌が『実方集』にふまえられている箇所についても検討を加えた。

平成30年度には、『源氏物語』と『古今六帖』の万葉歌の関係性に着目し、『源氏物語』のなかで『古今六帖』の万葉歌が引用されている叙述に関する考察を行った。具体的には、『源氏物語』の散文のなかで、万葉歌を中心とする『古今六帖』所載歌にみられる和歌的表現がいかに摂取されているかに検討を加えた。特に「面影」の語を詠み込んだ万葉歌に注目し、『古今六帖』「面影」項の所載歌の表現と、『源氏物語』の散文にみられる「面影」という表現とがどのような関係性にあるかを考察した。

また同年度には、上記の研究と並行して、『古今六帖』にみられる和歌分類の方式と『万葉集』の和歌分類方法とを比較し、両者がどのような影響関係にあるかに検討を加えた。『古今六帖』は全体を22部510余の項目に細分する構成の歌集であり、その点に同集の最大の特徴がある。一方で『万葉集』は全20巻の巻ごとに異なる構成をもつが、巻7・10・11・12・13・14の作者未詳歌を集めた巻には、歌に詠まれた「物」や「所」ごとに歌を分類するという、共通する性格が認められる。如上のことをふまえ、『古今六帖』の和歌分類法と、『万葉集』作者未詳歌巻(特に巻10)の和歌分類法の共通点・相違点に検討を加え、両者がいかなる関係性にあるかの

解明を目指した。

#### 4. 研究成果

本研究によって明らかにしえたのは、大別して次の2点である。1点目は、『古今六帖』の万葉歌は、基本的に附訓本の『万葉集』によって採録されたとみられること。2点目は、『実方集』・『源氏物語』といった後世の作品にみられる万葉歌の引用箇所の中には、『万葉集』そのものではなく『古今六帖』を通じて万葉歌を引用したとみられるものが散見されることである。以下に、より具体的な研究成果の内容を示すこととする。

平成29年度には、『古今六帖』がその成立後いかに流布したかという問題を『実方集』を題材にとって考察し、その成果を論文「古今和歌六帖と実方集 古今和歌六帖の享受の様相」としてまとめた。本論文では、『古今六帖』が10世紀末頃から11世紀初頭にかけて広く流布し、当時の人々にとっていわば「和歌の常識・教養」の基盤を成すような歌集として重用されたとみられることを指摘した。そのうえで、万葉歌のなかに、『万葉集』そのものではなく『古今六帖』を介して後世に享受されたものが少なくないことを明らかにした。さらに、同論文では、『実方集』所載歌に引歌された『古今六帖』歌が、『和泉式部集』や『源氏物語』にも引かれている場合が散見することをも指摘した。

つまるところ、多数の万葉歌を摂取して編纂された『古今六帖』は成立後ほどなくして流布し、当時の人々に作歌のための手引書として重宝されたのであり、そこに所載される約1200首の万葉歌も、同集を通じて人々に享受されたと考えられる。平安朝における万葉歌享受に『古今六帖』が大きな役割を果たしたことが窺い知られよう。

平成30年度には、『源氏物語』と『古今六帖』の万葉歌の関係の考察を進め、その成果を論文「『古今和歌六帖』第四帖《恋》から『源氏物語』へ 面影 項を中心に」(高木和子編『源氏物語の諸相』、2019年10月刊行予定、青簡舎)としてまとめた。特に「面影」の語を中心に検討を加えた。「面影」は『万葉集』の相聞歌に特徴的な語であったが、三代集には「面影」を詠んだ歌はほとんど採られていない(厳密に言えば三代集にも「面影」を詠んだ歌は数首みえるが、その大半が恋歌ではない)。その一方で『古今六帖』には「面影」が項目として立てられており、そこには万葉相聞歌を中心とする恋歌が集成されている。これは『古今六帖』が、「面影」という『万葉集』の相聞歌に特徴的であった語を拾い上げ、平安朝的な歌ことばとして錬磨していった様相を伝える事例といえよう。

一方で『源氏物語』でも、とくに散文において、恋情を表現する文脈で「面影」の語が用いられているが、それは『古今和歌六帖』「面影」項のあり方から少なからぬ影響を受けたものとみられる。すなわち『源氏物語』は、『古今六帖』を通じて、『万葉集』相聞歌に端を発する「面影」を詠んだ恋歌の詠みぶりを学び、それを自身の散文表現に取り入れたものとおぼしいのである。

なお、本稿で取り上げた「面影」はその一例に過ぎず、『源氏物語』には、『古今六帖』を通じて万葉歌特有の表現を摂取したとみられる事例が他にも存する。このことは、平安朝における万葉歌享受に際して『古今六帖』が重要な位置を占めたことを示している。また同時に、『古今六帖』が、平安朝にはあまり用いられなくなっていた『万葉集』特有の語を、平安朝的な「歌ことば」として再生する機能を有していたことを示唆している。『源氏物語』はそのような『古今六帖』の機能を知悉し、同集にみられる「歌ことば」を和歌的表現として物語の散文表現のなかに取り入れたものと考えられる。

さらに同年度には、『古今六帖』の構成と『万葉集』の構成との比較検討も行った。科学研究費助成金を受けての研究期間終了後となってしまうが、その考察内容は2019年度中に論文として公表する予定である。以下に、研究内容の概略を記す。

先述のように『古今六帖』は約4500首の所載歌を22部・510余の項目に細分する構成をもつ。その構成には、旧稿(田中智子「古今和歌六帖「雑思」の配列構造 古今和歌集恋部との比較を中心に」(『中古文学』101、2018年6月))で論じたように中国唐代類書や『古今和歌集』の影響が小さくないとみられるが、そればかりではなく『万葉集』作者未詳歌巻からの影響も存したと考えられる。特に、和歌を四季の雑歌・相聞に類聚する『万葉集』巻10に学ぶところが大きかったのではないかと、というのが、研究の結果得た見通しである。『古今六帖』が『万葉集』巻10に学んだとみられる点の一部を例示しよう。

『万葉集』巻10の最大の特徴は、全体を春夏秋冬の雑歌と相聞に大別し、その内部を「詠鳥」などの詠物歌、「寄草」などの寄物歌などに細分している点にある。一方で『古今六帖』は『万葉集』巻10とは異なって、全体を四季に分類しているわけではないが、一部の景物を四季に分類して掲出している箇所が存している。すなわち、《天部》にみえる 春の月 夏の月 秋の月 冬の月、春の風 夏の風 秋の風 冬の風、《田部》の 春の田 夏の田 秋の田 冬の田、《野部》の 春の野 夏の野 秋の野 冬の野、《草部》の 春の草 夏の草 秋の草 冬の草 である。当該の分類法は、明らかに、四季の別に基づき景物を細分する『万葉集』巻10のあり方に倣ったものといえるだろう。

なお、如上の見通しはまた、『古今六帖』が『万葉集』巻10を直接の採歌源としたことの証左ともなっている。もとより『古今六帖』の万葉歌のなかに「いはゆる六帖の萬葉歌の中には、萬葉集から直接採歌されたものが大多数ではあらうが、伝承歌を供給源とするものもす

くなく含まれてゐる」(大久保正「古今和歌六帖の萬葉歌について」(初出 1957 年、『萬葉の伝統』塙書房、1957 年))というような指摘がなされたこともあったが、稿者は、『古今六帖』は基本的に附訓本の『万葉集』そのものによって歌を採録したものとみるべきだと考えている。本研究は、その見通しを裏付けるものでもある。

以上、研究の成果の概要を述べてきた。つまるところ『古今六帖』とは、大量の万葉歌を取り込みながら編纂された、「作歌のための手引書」であった。本研究で明らかにしてきたように、『実方集』にみられる和歌や『源氏物語』の散文の叙述などに、『古今六帖』の影響の跡が著しく認められることは、その見通しを裏付けていよう。そして、「作歌のための手引書」という新たな形態の歌集を編むにあたり、『古今六帖』編者は、『万葉集』を単なる採歌源としたのではなかったとおぼしい。『古今六帖』編者は、「物」ごとに歌を分類する『万葉集』巻 10 のあり方に倣って『古今六帖』の構成を構築したと考えられるのである。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

田中 智子「古今和歌六帖と実方集 古今和歌六帖の享受の様相」『言語文化』、査読無、15 巻、2017 年、pp27-36

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

高木 和子編、田中 智子ほか分担執筆、青簡舎『源氏物語の諸相』、2019 年 10 月刊行予定、総頁数未定(共著)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8 桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。